



同志社大学 一神教学際研究センター
C I S M O R
Center for Interdisciplinarily Studies of Monotheistic Religions



センター長報告

半年の活動を振り返って

2016年度後期(10月—3月)活動として、講演、研究会がありました。

10月末に開催したCISMOR・カイロ大学東洋研究センター主催の「宗教的聖地」(「宗教的価値」国際会議第5回)は、軍事クーデターから3年後の、治安が回復したエジプトで開催され、同一会場で25人余が参加した大きな学術会議となりました。リビアからの参加者との会話では、国家体制崩壊 以前の状況を肯定していたことが印象に残りました。また聖地をめぐる討議は、あまり良くない云いではありますが、機会を得て、論議が活発に行われました。

徳富蘆花によるパレスチナ旅行記のアラビア語訳を記念して行われた国家翻訳センターでの講演及びシンポジウムでは、日本の発展および自由と安全をめぐる質問が相次ぎました。

2日間に渡って開催されたユダヤ学会議では、日本文化との関係にも焦点が当てられ、イスラエル国内での関心の高さを示すものであったと推測されます。

何光河・中国人民大学教授の講演は、政治体制が神と人間との関係を想定させる体制であって良いのかという発題で、宗教の根本問題に触れるものでした。

イラン米国間の核合意の意義を強調したモーラヴェルディ女性問題・家庭担当副大統領(イラン)の講演では、婦人の社会進出とエンパワーメントが主なる内容で、子育て支援、夫の育児休暇、国家公務員の男女比率や就職問題などが具体的な数字で示された後、質疑応答では女子学生との対話が進みま

した。人口8000万を擁する、市民社会の成熟度が高いイランの状況が紹介されました。

フィリップ・ポルティエ仏国立高等研究院教授の講演は、カトリックの宗教文化における政経分離(ライシテ)の分析で、理想と宗教文化との関係の一端を明らかにしました。

鎌田繁東京大学名誉教授の講演は、神の唯一性を重視するイスラームの中でのスーフイズムにおける神と人間の関係について見解が述べられ、また、現代脳科学の成果と重なる部分があるとの明快な説明もなされる興味深いもので、参加者も多く、盛会となりました。

また、CISMORにムハンマド・アリー・モスクの夜景と月の絵を寄贈された木下和画伯の講演では、月と故郷の桜をテーマとする画伯の一連の絵画が紹介され、テーマと表現の関係についてのお考えが伝えられました。

カイロ大学アラビア語能力検定試験が実施され、初級、中級の合格率が下がりましたが、徐々に制度化される方向に向かっています。詳細は措きますが、これらと並行して研究員の個々の研究活動や、CISMORへの国内外から代表団の訪問交流がありました。

こうした半年の動きを踏まえますと、CISMOR発足当時から環境に変化があり、宗教間対話からグローバリズム、難民問題に対する地域主義などの調和を目指した、他宗教文化を認識する現実的必要性が主要な流れになったものであったと思います。

(一神教学際研究センター長 四戸潤弥)



国際会議
公開講演会
シンポジウム
研究会
報告

国際会議

第五回「宗教における価値」

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)
カイロ大学東洋学研究所
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【発表者】 四戸潤弥、サミール・ヌーハ、戸根裕士
【日時】 2016年10月30(日)-31日(月)終日
【会場】 カイロ大学東洋学研究所

第五回「宗教における価値」国際会議 (The 5th International Conference on Values in Religion) が2016年10月30日から31日にかけて開催された。場所はエジプトのカイロ大学の東洋学研究所である。日本から当会議に正式に参加したのは、同志社大学神学部四戸潤弥教授、同大学サミール・ヌーフ教授、それに戸根の三人である。本会議には同志社大学の一神教学際研究センターも合同で開催に携わった。

第五回目のテーマは「宗教と信仰における聖地」(Holy Places in Religions and Creeds)と定められた。このテーマの下で各々の宗教性の価値が論じられるわけであるが、ここで少しそのテーマの例を紹介したい。

- ・ユダヤ教思想に表れた聖地
- ・キリスト教思想に表れた聖地
- ・イスラーム思想に表れた聖地
- ・一神教以外の宗教に表れた聖地
- ・東洋諸語と文学で表現された聖地
- ・聖地を巡る宗教間の対立
- ・聖地を巡る地域社会の変容

当会議初日は午前10時より開会式が行われた。その際にアズハル大学のモハメド・ハワーリー (Mohamed Hawary) 教授より同志社大学一神教学際研究センターが紹介され、サミール教授と共に日本の研究機関と合同で当会議を開催する意義など確認し、当会議の盛会が祈願された。

日本より参加した三人に割り当てられた発表のセッションは開会式直後であった。前述のハワーリー教授が当セッションのコーディネーターを務めた。発表は席順に従いサミール教授、四戸教授、戸根の順で行われた。

まずサミール教授の発表は「日本の宗教思想における聖地の象徴性ーイスラーム教と比較してー」であった。

次に四戸教授の発表は「日本の聖地ーイスラーム教との比較からー」であった。

そして戸根の発表は「聖地としての洗礼堂の機能ーミラノのアムブロシウスの著作を中心にー」(On the Function of the Baptistery as Holy Place: Concerning Writings of Ambrose of Milan) であった。

私の発表に関しては、当大会のテーマに従いキリスト教思想に表れた聖地という点を考えて、その例に洗礼堂という建築物に焦点をあて、その建築物の由来がローマ帝国の皇帝の墓であったことや、洗礼堂の儀式に都市の水道の設備が必要であったこと、又はアムブロシウスが腐敗から純潔への転換という洗礼の主題を明確化する為に工夫を凝らしたことなどを説明した。

このセッションの後に昼食を挟んで当国際会議は続行し、複数のセッションが午後7時まで開催され、活発な議論が展開された。その間、日本から参加した者たちは各発表を聴講していたが、ただそれだけではなく時に中座し、現地のエジプト・ラジオテレビ放送連合や朝日新聞の取材などを受けて、日本における一神教研究の現状などを報告した。



左から、戸根、サミール教授、
Dr. Naglaa Rafat Salem,
Prof. Mohamed Hawary,
四戸教授



カイロ大学キャンパス

翌日 10 月 31 日であるが、本来は当国際会議二日目であったけれども、発表者が予定より少なく早々に終わり、その後は日本より参加した者たちは、カイロ大学の方に近辺の一神教の聖地を案内して頂いた。

初めに案内されたのはムハンマド・アリーモスクである。その場所は、世界遺産にも認定されたカイロの歴史地区の中の城塞に位置している。この城塞とは、1176 年に十字軍の侵攻に備えてアイユーブ朝のサラフ・アッディーンにより建設されたものである。そしてこの城塞内の一角にあるムハンマド・アリーモスクとは、オスマン帝国より派遣されたムハンマド・アリーの命令の下に建設されたモスクである。

日本より参加した者たちはモスク内に案内され、モスクの建築上の特徴などの説明を受けた。例えば、ミフラブというメッカの方向を向く壁の窪みや、ミンバルという説教の為の階段上の王座など、実物の傍で解説して頂いた。その際に筆者が、モスク内で鼻を刺す悪臭を感じたので、傍らにいたカイロ大学のサラ・オスマン (Salah Osman) 教授にその正体を伺ったところ、それは絨毯に染み付いた鳩の糞ではないかと仰っていた。曰く、イスラーム教の初期には礼拝場は固定された場所ではなく、移動して場所の一角で絨毯を敷いて行っていたが、或る時以降、時に建造物の中が礼拝する場所となったので、その場合では頻繁に絨毯を洗濯するのは容易ではなく、開放している戸口から鳩が入って来て糞をしても、そのまま放置されることが多いという。こうして実際にモスクの中に入って案内して頂くことで、砂漠の民の宗教でもあったイスラームが、都市の中に根付く過程での、その状況の変化に容易に対応し難い側面に気づくことが出来た。

次にカイロ大学東洋学研究所の方に案内して頂いたのは、カイロのコプト教会地区である。この地は聖書の昔より由縁があり、マタイによる福音書 2 章 13 節から 23 節に、イエスを連れたマリアたち家族がエジプトに避難した記述が存在するが、ここがその当地であると言われている。実際この地区にある聖セルギウス教会の地下には、その家族が避難していた洞窟が存在し、今でも松明が灯され続けている。また当日は見学する時間が無かったが、この地区に存在するコプト博物館についても説明を受けた。曰く、このコプト博物館の中にはコプト教会に関する史跡が保存されているが、その他に写本の収集でも著名であり、代表的なものにナグ・ハマディ写本の一部や最古の詩編の断片などが収容されているそうである。後日、筆者が許可を得て他の写本も閲覧したところ、そうした代表的な資料の他にも、8 世紀の聖画像論争に携わったダマスコのヨハネや、3 世紀の異端と名高いサモサタのパウロなどに関する貴重な写本も収容されていると確認出来た。

以上、こうしてカイロのコプト教会地区の見学を終えて、当国際会議の全日程が終了したのであった。

最後にその帰路において現地の教授達と議論していた話題を報告したい。それはエジプトという地で国際的な研究会を開催する意義であった。即ち、この地では一神教が相互に影響し合って不可分に共生してきた歴史的な過程が分かるという。又古来より伝わる史跡や遺留品などを参照すると、文章だけでは把握しきれない活動の実態が明確になり、当時の生活様式の中での宗教の理解が容易になるとも指摘された。そしてその例に漏れず、当国際学会も有益な場となる事が出来たと皆で話し合っていた。改めてここで関係者各位のご配慮に感謝しつつ、今後の更なる成功を祈願したい。

(同志社大学大学院 戸根裕士)



サミール教授、四戸教授



戸根と Dr. Naglaa Rafat Salem

公開講演会

天と人の際—漢語神学の歴史的歩みと未来の展望

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 何光沪（中国人民大学教授／香港漢語基督教文化研究所フェロー）

【日時】 2016年11月9日（水） 16:40-18:15

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

「漢語神学」の語と今日の中国の漢語神学運動は1990年代半ばに現れたが、何氏はその語を広義に漢語を用いる神学とし、7世紀の景教、遅くとも17世紀のカトリックに始まるとする。

中国文明はある種の宗教を精神的基礎とするが、それは上帝あるいは天への信仰である。しかし中華文明は早い段階で「天子」概念という「文化的癌の遺伝子」を残した。天子は中国政治上の最高支配者を指し、支配者は自らを上帝の子孫とした。また天子概念は君主専制を神聖化し、絶対化した。それは始皇帝から既に実現され、制度化された。

儒教は絶対的な君主制を思想的に批判したがそれを超える制度にはなれず、多くの儒家は排斥されるか政権に服従するに至った。他方、仏教は天子を敬い、それに依存する必要を認識して完全に政権に頼った。道教は明・清時代に民間宗教と共に抑圧され衰退した。

君主を神や天子と見る偽りの神聖化は、専制主義に陥る権力崇拜となり、その結果、社会全体の真の世俗化に導いた。1980年代からの中国の経済的改革は政治制度に触れていないため、権力崇拜が政治権力を絶対化し、人間の本性を癌化させる制度になっている。この文化的癌の遺伝子は、中国史において人間の本性を、さらに文化・文明の全体まで腐敗させ、今日に至っている。

今日の中国はこのような生死の境界に至って、近隣諸国の変化を注視し、民族特性という概念を放棄し、古典文明の腐敗後のヨーロッパの復興の歴史の原因を反省する必要がある。このような思想的・精神的な改革開放とキリスト教の受容、研究が必要である。キリスト教こそ神の性質に関する探究やその解釈、そして世俗的なものの神聖化に対するその抵抗において、今日の中華文明を救う薬である。1980年代から中国の知識人がキリスト教を対象とし、人文学領域において研究し始め、このような世俗の世界において神の世界を構築するこ

とは歴史の必然と需要である。

人間の意識は歴史の必然性を動かすことは出来ず、神の計画も人間の意識と予想を超えている。このような状況において、人に出来ないことの中に可能性が潜んでおり、人の目からは不合理なことが現実になる可能性もある。これはこの二十年にわたる漢語神学研究の最も大きな特徴であり、また広義の漢語神学の特徴でもある。

キリスト教ではイエス・キリストのみが神の子であり、全ての人間は被造物で、神の前に平等に罪人であるため、君主であれ神の子の身分の独占は許されない。このような思想は中国史上の政治制度やイデオロギーに反するゆえに、キリスト教は大規模な抑圧や迫害を受けた。それは政治的な抑圧に加え、思想的・文化的誤解でもある。このような不利な状況の中、最大の逆説は、1900年代の後半に中国大陸から消えたキリスト教が再び生まれ変わり、勢いよく発展してきたことである。

漢語神学やキリスト教研究は、1949年から約30年間ほぼ空白状態だったが、1980年代に『宗教辞典』と『中国大百科全書』が出版され、そこで初めてキリスト教の評価が客観的な解釈になった。1990年代に狭義の漢語神学運動が現れ、漢語神学の論文や書籍が多数出され、その影響は学術界、ビジネス界、文化界、政治領域まで広がる。

漢語神学は、巨大な文化と伝統および現実の制度に、また「文明の衝突」や多元的・学際的な問題に対面しなければならない。このような厳しい環境の中、漢語神学の学者は現在第四世代まで活躍しているが、なお漢語神学は周縁化されている。しかし漢語神学の大きな動向は、最終的に中国文化、中華文明の再生に重要な精神的役割を果たすだろうと述べ、氏は講演をしめくくった。

(CISMOR 特別研究員 朝香知己)



何光沪教授と李劍峰氏（通訳）

公開講演会

木下和の世界

—エジプトそしてイスラームの人々との邂逅

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 木下和 (画家)

【日時】 2016年11月19日 (土) 13:00-14:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス クラーク記念館チャペル

本講演は、木下和氏が同志社大学一神教学際研究センターに絵画「遺されしものへ～古都月映・カイロ'10」を寄贈いただいたご縁で実現したものである。木下氏は、美術を志すに至ったきっかけ、二人の師との出会い、エジプトに心を惹かれるようになった経緯について、エジプトの文化遺産にインスピレーションを受けて描かれた絵画作品を交えながらお話しされた。

木下氏は、高校時代より歴史に興味を持ち史学を志したものの、諸事情からその思いを絶って広島大学の美術科に入学、師匠となる竹本三郎先生に出会われた。美術科は、美術の教員を養成するための課程であるため、日本画以外の科目、すなわち油絵、水彩、彫刻、デザイン、工芸、彫刻を修得しなければならなかった。しかし、美術科に入学したのがある意味偶然であったという木下氏にとって、様々な美術領域に挑戦するのは逆に新鮮で、特段躊躇することはなかったという。また、竹本先生と水彩画を描くようになり、人の何倍も描かなくてはならないと言われた時にも、「絵を描くのは上手ではなかったけれど、絵を描くのは好きだ」という信念のもと日々努力を重ねてきたという。

大学入学後は、「単調なる日々の中に、浮遊する映像と映像との邂逅。順応すれども同化し得ない心質。その苛立たしさに、時と刻との間に身を委ね、固着しきった空虚さで、今日もまた、日々の証のごとく画面との対話が始まる」という木下氏の言葉にも反映されているように、瀬戸内海の風景を原風景として捉えた作品を日々手掛けてこられた。在学中には、新制作協会に絵を出品してみるよう竹本先生に促され出品、初年度こそ入選を逃したものの、翌年には入選を果たしたそう。また、竹本先生の紹介で洋画家の荻太郎先生とも知り合い—といっても、高校二年の時に友人と一緒に行った現職の美術教員のために開かれていた講習会で荻先生に出会っていると判明したそう—、指導を受けるようになった。このように、二人の師との邂逅が木下

氏の画家としての道に多大なる影響を与えたということが、講演会の前半で説明された。

エジプトとの出会いは、1965年に京都市立美術館で開かれていた「ツタンカーメン展」に足を運んだ時とのこと。広島から夜行列車に乗り、朝から長い行列に並んで見た黄金のマスクやウジャトの目に魅了されたという。しかし、エジプトとの結びつきがより強くなるのは、1994年1月にエジプトをご夫婦で旅してからだという。ミナレットから流れるアザーン、アブシンベル神殿とラムセス二世の像、近代的なギザの街並みの中から突如現れるピラミッドと死者の街、生と死が交錯する不可思議な空間に惹きつけられたそう。

木下氏は、その後も何度もエジプトに足を運んで何枚ものスケッチを描き、帰国後旅路で得たインスピレーションやスケッチをもとに数多くの作品を手がけられた(本講演では、その一部が紹介された)。美術の教員として勤めた高校を退職した2003年に開催した展覧会には、エジプト考古学者として知られる吉村作治先生が来訪され、「(この絵が)何時に描かれたものなのか、私にはわかる」との感想を伝えられたという。さらに2008年には、国際交流基金の協力を受けてカイロのオペラハウスギャラリーで個展「遺されしものへ—エジプト・ファラオの伝言」を開催、木下氏の作品がエジプトでも紹介されることとなった。その後もエジプトの文化遺産や風景、現在は、推定樹齢170年でありながら今を盛りと咲き誇る自宅の裏山(江波山)のエバヤマザクラを主題とした作品を数多く手がけられ、現在も精力的に個展を開催されている。

講演会には、木下和氏の教え子やご友人も数多く来場され、講演会終了後に行われた「遺されしものへ～古都月映・カイロ'10」の見学会も盛況のうちに幕を下ろした。

(CISMOR 特別研究員 川本悠紀子)



木下和氏



「遺されしものへ
～古都月映・カイロ'10」

公開講演会

中東和平への心理学的アプローチ —和解への文化融合的解明

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講師】アリー・ナドラー (テル・アヴィブ大学名誉教授)

【日時】2016年11月20日(日) 13:00-14:30

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

本講演でナドラー氏は、「中東和平への心理学的アプローチ—和解への文化融合的解明—」という演題を、「1. イスラエルとパレスチナ間の紛争の歴史的背景」、「2. 紛争の背景にある心理的側面について、紛争の言説(ナラティヴ)と被害者意識とその競争状態という観点からの検証」、「3. 紛争と和解に関して異文化間での作用影響について」の三点から論じた。

パレスチナ人とユダヤの人々はヨルダン川流域から地中海沿岸にかけて何世紀にも渡り共生してきた。現在のイスラエル、パレスチナ間の紛争は、1947年に行われた国際連合総会決議181号(パレスチナ分割決議)が始まりである。イスラエル、パレスチナ間の紛争は、中東戦争として、4回のアラブ・イスラエル紛争として、そしてパレスチナ抵抗運動として続いているが、この衝突が解消される見通しは立っていない。このような現在の歴史的背景、政治的要因、対立の有様については、様々な要因が考えられるが、講演ではこの対立の心理学的観点について論じられた。

ナドラー氏によると、軍事行動や対立は生命財産の安全を脅かし、また破壊行為を伴うが、対立における相手の非に関する主張と、自己の絶対的正当化こそが、人々の苦境を助長し、紛争状態の解決を困難にしているとされる。なぜなら、自身が所属するグループは絶対的に正しく、正義であるとする一方で、相手は絶対的に間違っており、不当で不正義であると主張され、それが教育システムの一部に組み込まれることで、相互理解が妨げられるだけでなく、問題を解決する糸口を見逃してしまうからだ。

なかでも、「被害者による言説」は、紛争解決を考える上で重要な観点で、氏はこの点について実際の例を出して説明した。数年前、テルアヴィブ大学で「国際紛争」の講座を担当していた際、ユダヤ人の学生はシオニズム運動やホロコーストについて引き合いに出し、他方、パレスチナ人の学

生は1948年以降のパレスチナ人の苦難を語った。そして両者ともに、自らの共同体が経験した被害を語ることで、自身ならびにその共同体を合法化しており、唯一の被害者であると主張することに何の躊躇いや相手への配慮も見られなかった。このような「本当の被害者とは誰か」を争う対立する両者の言い争いは、他の紛争地域でも見られることから、自己の絶対的正当化を図るプロセスは普遍的といえるようだ。

ナドラー氏によると、被害者意識を持つことで他者に対する共感の必要性がなくなるだけでなく、「被害者である」というレンズのみを通して世界を見ることに繋がってくるという。またこの被害者意識から発生するもう一つの現象として、「過去の歴史において被害者であった」という怒りや不満を現在目の前にいる敵に転嫁することがあり、「被害者なので何をやっても正当化される」と考えることさえあるそうだ。このような理由から、紛争地域における「被害者意識の奪い合い」は、和解に対する意識を低下させるだけでなく、非生産的で破壊的結果を生みかねないという。

講演の締めくくりとしてナドラー氏は、「被害者意識の奪い合い」とそれに付随する問題を解決する方法は二つあると提唱した。一つ目は、自身が被害者で相手が加害者であるという考え方ではなく、両者ともに被害者であり加害者でもあるという意識を啓発していくこと、そして二つ目は、相手の被害に対し理解を示そうとすることだ。また、「理解」という点で忘れてはならないのは、「平和」という概念は異文化間においてその定義が異なりうるということだ(欧米では戦争と平和という風に二極的に捉えがちである一方、戦争と平和の間に幾段階があるとする文化もある)。先に挙げた二点を啓発し、文化間の概念の定義の相違を理解し合うことで、過去の清算は少しずつ実現されていくのではないかと述べ、氏は講演を締めくくった。

(CISMOR 特別研究員 川本悠紀子)



アリー・ナドラー氏

公開講演会

ヨエル・ホフマンの創作 — 宗教と文化の交差点

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

同志社大学神学部・神学研究科

共催： バル・イラン大学ユダヤ学学部

【講師】 イーガル・シュワルツ (ヘクシェリーム・ユダヤ・
イスラエル文学・文化研究所所長、ベングリオン大学教授)

【日時】 2016年11月27日(日) 13:00-15:00

【会場】 同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK112 教室



イーガル・シュワルツ氏

シュワルツ氏は、ホフマンの作品を引用しながら、彼の作品世界とその特徴について講演した。

ホフマンを初めて読んだ人に共通の反応の一つは混乱であり、彼の登場以来、批評家や研究者は彼の作品世界を理解しようと様々に試みているが、私はそれを post-apocalyptic (黙示的出来事後) の叙事詩であると考え、彼の芸術的偉業の背景にある哲学的前提は、post-apocalyptic であるということ、すなわち第二次世界大戦中に文明世界は自死したということである。そして彼から見れば、ユダヤ人は西洋の道徳性と品位を明瞭に表す存在である。ホロコーストと共に西洋の文明、特にヨーロッパの普遍的な道徳的達成と合理的な哲学は死に、同時に彼の作品の中で形成される物理的世界も重心を無くした。彼の世界はこのような性格を持つゆえに、ホフマンはあらゆる奇抜さに惹かれ、その作品は奇異な言葉遣いで満たされる。登場人物は出身も時代も様々で、大抵はよくわからない事柄に関わっている。彼らは共通して独特な認知のメカニズムを持ち、それを私は「サイクロプスの目」と呼ぶ。彼らはサイクロプスの目を持つゆえに、他の人に見えないもの、そして他の人が見たくないものを見ることが許されている。

一部の批評家は、第二次世界大戦を経て西洋近代型の「私(自己)」はバラバラに砕け散ったというポストモダンの哲学の結論の一つがホフマンの作品で展開する人間の状況にも言えると考え、また他の批評家は、ホフマンの作品での「私」とは仏教的な自己であるとする。私も彼の人間像は第二次世界大戦、ホロコーストという恐怖に深い影響を受けていると思うが、彼の「私」の概念は決してポストモダンでも仏教的でもなく、彼自身の詩学としての結論はポストモダニズムとは正反対のものだと思う。

ホフマン作品の研究者、批評家達は必ずと言っていいほどその独特の形式を取り扱う。特に目立つ部分に、パラグラフの各行が短い点があるが、私見では叙事詩、叙事文学はいずれも似た形式で書かれている。この叙事詩的な形式の使用は、ワイルドである一方で非常に細心に秩序に敏感な作家であるホフマン自身の気質に合っていると考える。

ジャンルという文脈でのホフマンの独特な点は、どの作品も非常に抒情的な面が強いということである。この側面が一番よく現れているのは、彼が自分の作品の主人公を非常に親密(intimate)に取り扱っているという点である。ホフマンは主人公達を愛しており、彼自身が彼らと家族として繋がっている。この登場人物達への愛ある取り扱いの源には、ホフマンによる post-apocalyptic な世界の捉え方がある。彼は、人間の悲劇の源は、人間が意識ある存在であること、また自分はいずれ苦しんで死ぬという認識から逃れられないことにあると強く信じている。この認識論的事実ゆえに、彼は、人間、とりわけ自らの状況の本質的な不条理に意味を与えようとする人間が愛すべき存在だと考えるのである。ホフマンの倫理の特徴を一つ表すならば、私は「kindness」、全ての人に対する優しさを選ぶ。彼の kindness は、とりわけサイクロプス達、すなわち国を追われた人、移民、幻覚を見る人、売春婦、未亡人、孤児、いずれも目が見えないが賢明な人達に向けられている。ホフマンの芸術的偉業のスピリットとは、辛辣な、グロテスクな側面を持つと同時に我々の心に触れ、涙をあふれさせる気持ちにさせるようなものであると述べ、氏は講演を締めくくった。

(CISMOR 特別研究員 朝香知己)

公開講演会

イエス時代のシナゴークの機能と役割

ーガリラヤ地方テル・レヘシュ遺跡の新発見シナゴークの意義

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：科学研究費研究助成金基盤研究A「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明的研究」（代表＝市川裕 東京大学大学院人文社会系研究科教授）、同志社大学神学部・神学研究科

【講師】モルディハイ・アヴィアム（キネレット・ガリラヤ考古学研究所所長）

【日時】2017年2月2日（木）16:30-18:00

【会場】同志社大学今出川キャンパス 至誠館1階S2教室

下ガリラヤの東部にある丘陵地域にあるテル・レヘシュ遺跡は、ヨシュア記で言及されているアナハラトにあたると考えられている。2006年から天理大学、立教大学、東京大学がこの遺跡の発掘に従事しており、現在では桑原久男先生（天理大学文学部教授）が発掘チームを率いている。2016年夏に行われた発掘の結果、帝政ローマの最初期の第二神殿時代に建てられたと思われるシナゴークが見つかった。イエスが活動していた時代のシナゴークがガリラヤ地方で見つかったのは、ミグダルで発見されたシナゴークを除くと初めてのことであるため、本発見はイスラエルのみならず全世界で報道された。本講演では、上記発掘チームのイスラエル側の代表であるモルディハイ・アヴィアム氏が、テル・レヘシュのシナゴークの発見の意義や同時代のシナゴークとの関連について検証した。

本発表で主に扱うテル・レヘシュのシナゴークと同時代である、第二神殿時代のシナゴークに関する史料上の言及は、新約聖書の中で確認できる。これらの言及は、シナゴークの中でユダヤ人がどのようなことをしていたのかを知る上で非常に重要だという。この他にも、フラウィウス・ヨセフスやアレクサンドリアのフィロンの史料、ディアスポラのユダヤ人による奉献碑文や、二十世紀初頭にエルサレムで発見されたテオドトス碑文（前一世紀）などから、古代におけるシナゴークの実態を知ることができる。

考古学上のシナゴークに話を移すと、マサダのシナゴークが現在知られている中では最も有名と言えよう。この他にもシナゴークの遺構は、ヘロデオン（既存の建物にベンチを付け加えてシナゴークに変化させている）、ムラ（トラーの巻物を置いていたであろう壁龕があるシナゴークが発見された）、モディン（建設年代が三段階あるシナゴーク）、キリヤット・セフェル（十軒の家々とシナゴークからなる村全体が発

掘されている。小さな共同体にもシナゴークがあったということを伝える貴重な事例）、ミグダル（テル・レヘシュのシナゴークが発見されるまで、第二神殿時代のシナゴークとしては唯一の例であった）などから見つかっている。

さて、日本隊が発見したテル・レヘシュのシナゴークは、イエスが活動していた時代のシナゴークとしては二例目である。この遺跡は、村とするには小さすぎる一方で、秩序だった空間構成を持つことから、農業に関連した小規模な共同体であったのではないかとアヴィアム氏は考える。テル・レヘシュからは、フレスコ画の断片、漆喰細工の他、調理用土器、ランプ、トラヤヌス帝期のコイン、石灰岩製容器（ユダヤ人が居住していたことを示す証拠）などが見つかっており、これらの遺物をもとに本遺構の年代は後一世紀頃であるとされ、その後二世紀半ばにはこの居住地域は放棄されたと判明している。

テル・レヘシュのシナゴークは、おそらく二本の柱によって支えられた屋根構造を持つ建造物で、壁沿いにベンチが配されていた。その空間構成は、二年前にディアブ村（ベンヤミン近郊）で発掘された非常に小さなシナゴークに似通っていることから、農場に関連した小規模な私的シナゴークがイエス時代に新たに出現したことを示唆する例として解釈できるのではないかとアヴィアム氏は指摘した。その上で、このような小さな共同体における小さなシナゴークは、イエス時代の社会構造を読み解く鍵となるのではないかとの見解を示した。

2017年夏に行われるテル・レヘシュのシナゴーク発掘により、このシナゴークの全貌が明らかになる。イエスが生きた時代の社会を再構成する上で、テル・レヘシュでの研究成果は重要な知見を与えるであろうと述べ、氏は講演を締めくくった。

(CISMOR 特別研究員 川本悠紀子)



モルディハイ・アヴィアム氏

公開講演会

イランにおける女性の社会進出 —現状、政府の取り組み

主催： 笹川平和財団 笹川中東イスラム基金
同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 モーラヴェルディ (イラン女性・家庭環境担当副大統領)
【日時】 2017年2月15日(水) 15:30-17:00
【会場】 同志社大学今出川キャンパス良心館 RY305 教室



モーラヴェルディ氏

モーラヴェルディ氏は、イラン・イスラム共和国の社会の変化と変遷について、女性をめぐる状況を中心に講演した。

1979年のイラン・イスラム革命以降、イランは戦争や経済制裁など様々な問題に直面し、困難な状況だったが、女性の地位向上、人材開発に関する指標の向上は目を見張るものがある。特に第三次五か年計画後は女性の役割が重視され、各省庁や政府機関が互いに協力、連携し、女性の地位向上のための取組を推進している。その結果として女性教育の指標の顕著な向上、特に初等教育におけるジェンダー平等 (gender equality) の達成などが見られる。これらは単に女性教育が普及したことのみならず、今後のより積極的な女性の政治、経済、社会、文化における参画の大きな基盤となっている。また女性は、単に学問、科学技術の生産や出版において大きな役割を果たしているのみならず、次世代の子供達を育成するという重要な役割を担っている。それゆえ女性達の研究や教育における役割を正しく認識することとそのエンパワーメントは、国の開発計画の柱の一つとして掲げられている。

革命が成就した当時、全学生の69%が男子学生で、女子学生は31%に過ぎなかった。しかし公共教育の普及や社会正義の実現の強調などの取組の結果、公共教育の機会が平等に与えられ、大学への女性の進学志願者も増えた。そして高等教育は女子の能力開発、技能開発に対して大きな役割を果たしている。2002年には女子学生の割合が51%となり男子学生を上回り、その後も増加が見られたが、政府が両者の数のバランスを取る政策を実行したことで、現在では男子学生53%、女子学生47%となっている。しかし今でも医学部など女子学生の割合の方が高い分野もある。

この数十年の間で、健康や教育などの分野における女性を取り巻く環境は改善し、女性と男性が平等かつ公正に経済的、社会的な資源にアクセスできる環境作りが政府の優先課題として掲げられてきたが、なお男性の方が社会的、経済的な地位では優位に立っている。それゆえ社会的な基準や評価の是正、社会変化に則した法的改正、家事や高齢者等の介護の価値を見出すこと、財産や様々な機会の平等かつ公正な分配などを達成してこそ、女性達が持続的に社会、政治、文化、経済の分野でより積極的に参画することが出来ると考える。

核合意の履行後、経済制裁が解除され、イラン経済は大きく改善、発展しているが、このような中、イランの女性達の本来の力をより正しく、より効果的に活用しようという強い意志、環境、アプローチが存在する。知識集約型企業的女性経営者は現在320人を超え、商業や貿易の分野においても女性達は多くの地方の商工会議所のメンバー、理事、幹部となり、イラン国内や中東地域、世界各国の市場により積極的に参画しようとしている。

政府、特に女性・家族担当副大統領府は政策立案機関として、女性の潜在力を活かすべく、女性が様々な分野において今以上に役割を果たすことが出来るよう、法的、社会的、文化的に必要な基盤を整備し、指導的政策を立案している。イランと日本が、仕事と家庭の両立に関するアイデア、政策の成果や具体的な詳細の共有、文化交流を促進するための女性が中心となる国際的な機関の設立、また大学卒業者、家事や企業等に関する政策や計画を共有することで、女性のエンパワーメントとより効果的な社会参画を目的とした総合的な取組を進めて行きたいと述べ、氏は講演をしめくくった。

(CISMOR 特別研究員 朝香知己)

公開講演会

イスラームの深層を探る

主催： 日本オリエント学会
同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 鎌田繁（東京大学名誉教授、前日本オリエント学会会長）
【日時】 2017年02月25日（土）13:00-15:00
【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

本講演「イスラームの深層を探る」は、一神教・多神教とはどのように理解すればよいのかという点に始まり、イスラームという宗教そのものについて、そして神秘主義思想とはどのようなものであるかを見ていくことを通して、イスラームという宗教の総体の理解を進めようとするものであった。

これまで一神教と多神教は、対立しあうものであるかのように考えられてきた。しかし、世界各国の宗教やそれに付随する思想を見ていくと、この対立の曖昧さが見えてくる。たとえば、本居宣長は古事記の注釈の中で「人間以上の素晴らしい力を持っている者が神である（尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物をカミとはいふなり）」と述べて、日本の多神教世界を言い表している。一方、一神教であるキリスト教での神は、天地人を創造し裁く大きな力を持つものという考えが一般的である。しかし、人間より力を持っているものであれば神であるという多神教的な考えに基づくのであれば、キリスト教の聖者や天使は、多神教が神とする範疇に入ることになるだろう。このように、自身が信じる宗教に根差したものの見方で他の宗教を見ていくと、一神教・多神教についても、その定義が変わってしまうため、これらを区分するのは出来るだけ避けた方がよいと言えよう。

イスラームに話を移すと、一神教・多神教という区分はしたくないとはいえ一神の唯一性を重視する宗教であるといえる。この神の唯一性は信仰告白（シャハーダ）の「アッラー以外に神はない」、「ムハンマドは神の使徒である」という文言で確認できる。そして、イスラームという言葉が服従、帰依を指すことからわかるように、主人である神や権能を持つ預言者の言うことに従って生きることが、イスラームに入るといふことであるといえよう。一方で、ムスリム・ムスリマは、人間が理性的・法学的に物事を考え判断することも推奨されている。

さて、鎌田氏によると神の唯一性にはもう一つの見方があり、「神が一である」ということは、神のみが存在しているということ、創造されたものの存在というのは本当の存在ではない」と言い換え得るという。つまり、先に見たような「神は主人であり人間は奴隷である」という考え方では、神と人間は全く別のものとして捉えられており、これら二つの存在があつてこそ神が創造者となることができる。しかし「神のみが存在している」という見方を取るのであれば、唯一絶対の實在というものが全体を遍く広がっていて、それが完全な形で神として現れたり、不完全な形で被造物として現れたりする、と考えることも可能である。

続けて鎌田氏は、最終的には神も人間も一体になれるのだという考え方として、神秘主義があるとし、「原初の契約」、ラービア（801年没）、アブー＝ヤズィード・バスターミー（874年没）、ルーミー（1273年没）の史料や詩を検証した。また、モッラー・サドラー（1640年没）の「存在の本源性説」について説明し、本質以前に存在があり、本質という形を通して姿を現すという説に言及した。そして、存在エネルギーが世界に遍満している状況そのものが、クルアーンでいえば創造する前の神と被造物とが一体となっている状態であると解説した。

このように、イスラームというのは、神の言葉に従うことを非常に重視する教えであるとする考え方がある一方で、「神は唯一であり、神しかいないのだ」という立場からイスラームの教えを考究するサドラーらによる物の見方もある。「イスラームの深層」とはまさに、神と人の区別すら消えるような「唯一なる實在性」を基礎にして物を考えていこうとする人ということになるのかもしれない。

（CISMOR 特別研究員 川本悠紀子）



鎌田繁教授

公開講演会

フランス社会の中のカトリシズム —「復興」の背景と内実を考える

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 フィリップ・ポルティエ (高等研究実習院教授、フランス)
【日時】 2017年3月3日(金) 17:00-19:00
【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

1970年代の後半に中世史家ジャン・ドリュモアは、キリスト教の刷新は可能ではないかと述べた。これに対し、歴史家ミシェル・ド・セルトーは「キリスト教の死の美しさ」について語り、破裂し拡散したキリスト教は、フォークロア化しつつあり、もはや文明の廃墟でしかなく、そのうちカトリックを理解する者はいなくなるのではないかとの見解を示した。このセルトーのアプローチは2000年代初頭に再び取り上げられ、社会学者のダニエル・エルヴェ＝レジェは、教会は信者数や信仰の危機に直面しているだけではなく、西洋人がキリスト教文化からの脱出に直面していると論じた。そして、キリスト教文明に由来する規範やそれに基づく生活が今日では消えつつあるとした。一方で、カトリックの普遍性の体系が未だ根強く残っていることを示す同性婚を認める法案に対するデモなども起きている。このような社会的背景を踏まえ、本講演ではカトリックの消滅か抵抗かという二者択一の話ではなく、それをどう乗り越えていくのかという点について論じられた。

現在のフランスにおけるカトリックを取り巻く状況は、中世以来農村や家族の周りに構築されてきた有機的な世界から脱出した結果であるという。かつてのカトリックは、信者や社会を包括し、規範性を押しつけてきたが、今日のカトリシズムはより主観的かつ再帰的になっており、様々な社会的ファクターの解釈に委ねられているという。

本講演の前半でポルティエ氏は、包括的な宗教の消滅について取り上げた。ドリュモアによれば、カトリックには位階制に基づく体制があり、中心と周辺とが四散分裂した構図があったという。このような構図は今日にも当てはまり、例えば宗教が政治に与える影響力が地方と都市との間で異なるという点に見ることができる。ポルティエ氏によると、1960年代以降、フランス社会が第二の近代の個人主義の秩序に入るこ

とで、国家と宗教間の機能分化や市民社会と宗教社会の間の機能分化が拡大していったといい、このような国家と宗教間の機能分化が生じたのは、「法の生産」と「法の流通の有り方」に起因するという。そして、既存の価値や規範、そして宗教を司法のもとに従属させるようになったことが、カトリック文化が解体していることの表れととれるとの見解を示した。

このようなカトリシズムの衰退は、カトリック信者の間でも確認でき、自身がカトリック教会に所属していると考えられる者は年々減少傾向にあるとの統計結果が出ている。これは何も信仰に特化した話ではなく、思考の面でも見られるといい、それまで継承されてきた教会の教えや規範に賛意を示さない信者も増えている。このような事例から、聖職者の言葉に縛られてきた農村文明が終焉を迎えたと論ずることができるが、ポルティエ氏は宗教的空白という観念に全てを帰結するのは安易であると指摘した。そして、現在起こっているのは、包括的な宗教が崩れ去ったということではなく、再帰的なメカニズムが駆動されている状況であるとした。そして、外在的なし内在的要因(第二バチカン公会議)によりカトリックが変化していることを、カトリック信者自身の行動(内側からのカトリシズムへの動員)や政治家による宗教と関連したパフォーマンス(外側への影響力)なども考えて捉える必要があると述べた。

最後にポルティエ氏は、現在の状況は新しいカトリック信者の体制が形成されているとした。フランスにおけるカトリシズムは、かつてのような押し付けではなく、再帰的な状況になっており、個人化・不確実化の時代に個人を安定させるものとして宗教が個人に慰めや励ましを与え、公共政策を下支えしていると理解すべきであろう。

(CISMOR 特別研究員 川本悠紀子)



フィリップ・ポルティエ氏

2016年度活動報告 (要旨記載分を除く)

主催イベント

【国内開催】

2016年11月27日(日)-28日(月)

▼国際会議

ユダヤ学会議

“Judaism and Japanese Cultures: Encountering Judaism and Buddhism in Hebrew Literature Conference in Honor of Yoel Hoffmann’s Writings, Translation and Beyond”

講師：Yigal Schwartz (ベングリオン大学教授)

会場：同志社大学烏丸キャンパス志高館 112 教室

2017年1月27日(金)

▼国際会議

“Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East”

講師：Goita Hourani

(ノートルダム大学 移民研究センター・センター長)

会場：同志社大学烏丸キャンパス志高館会議室

2017年3月27日(月)

▼ワークショップ

“The Differential Diffusion in the Middle East of ‘Small Technologies’ from Europe and the USA”

講師：Uri M. Kupersmidt (ハイファ大学教授)

会場：同志社大学今出川キャンパス 至誠館 3F 会議室

2017年2月19日(日)

▼その他活動

カイロ大学アラビア語能力検定試験

会場：同志社大学今出川キャンパス神学館地下 G1 教室

共催イベント

【国内開催】

2016年10月17日(月)

▼公開講演会

「2016年大統領選挙とアメリカの外交政策」

講師：David Harris (米国ユダヤ人協会 (AJC) 理事長)

阿川尚之 (同志社大学特別客員教授)

会場：同志社大学東京サテライト・キャンパス
セミナー室

お知らせ

CISMOR の出版物である『一神教学際研究 (JISMOR)』と『一神教世界』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR 最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧ください。

発行 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

TEL 075-251-3726 FAX 075-251-3092

〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入

E-mail rc-issn@mail.doshisha.ac.jp

編集 CISMOR 事務局編集部